

中津藩における近世の武芸流派について

濱田臣二・矢野真宏*

Regarding the Bugei Styles of the Early Modern Times in Nakatsu Feudal Clan Shinji HAMADA and Masahiro YANO*

Abstract

This study aimed to elucidating the characteristic of Bugei; martial arts styles, the environment of dojo, at Nakatsu feudal clan in the early modern times. Yoshitaka KURODA, what we call, Kanbee KURODA made the Nakatsu Castle in 1588. In the Edo-period Nakatsu feudal clan had sovereignty over the land around Nakatsu, Shimoge-gun, Buzen-koku; around Nakatsu City, Oita Prefecture current. Bugei and learning were actively carried out in the bushi community at Nakatsu feudal clan.

Nakatsu feudal clan, had produced many excellent human resources, for example Yukichi FUKUZAWA, a pioneer of the academic of Japan and a founder of Keio University, Ryotaku MAENO who wrote Kaitai Shinsho, the first Japanese human anatomy book, and Toranosuke SHIMADA, one of the famous Kenjutsu-ka; swordsman at the end of the Edo period.

In Nakatsu feudal clan at the early modern times, several Bugei were taught not only in Hanko Shinshukan; the public feudal clan school but also in the private dojos; private schools of shihan-ke, the teachers who had his own style of Bugei. In Nakatsu feudal clan, nine kinds twenty-two styles of Bugei were taught at the early modern times. Five styles of Kenjutsu; Japanese fencing and four styles of Sojutsu; Japanese spearing were mainly taught at that time. According to classifying a feature of soryu; making own style of Bugei, Bugei styles were made at the beginning of the early modern times, and there were many styles which did not have a great influence on a later generation.

Keywords : Nakatsu feudal clan, Early modern times, Shinshukan, Bugei education

はじめに

古代には九州の玄関口であった豊国とよのくにに属した中津藩は、山国川を中心に集落を形成して栄えてきた。廃藩置県によって、大分県ができるまでは、北九州から宇佐までの周防灘に面した細長い領域で豊前国の一部であった。現在では、中津市として大分県の西北端に位置し、人口約85000人の県内3番目の都市である。

天正15年（1587）に九州平定を成し遂げた豊臣秀吉から所領を受けた黒田孝高（官兵衛）は、翌年の天正

16年（1588）に中津城を築城し、城下の発展に取り組んだ。この黒田氏から細川氏、小笠原氏へと継承され、それを引き継いだ奥平氏は、初代昌成以降、中津藩を代々統治し、154年間、9代にわたり藩政を取り仕切った。

近世の武士教育においては、全国的に文武を修めることが肝要とされた。同様に中津藩でも士民教化において、殊に儒学を柱とした教育に力が注がれ、文武兼修が奨励された。その中核となったのが藩校「進修館」である。中津の卓越した教育は、我が国の学問の先駆者で慶応義塾の創設者となった福澤諭吉や、解体新書を著した前野良沢、幕末の優れた剣術家である島田虎之助など、幅広い分野で高名な人材を輩出した。

中津藩における近世の武芸教育は、進修館を中心に城下の師範家の道場でも行われ、全部で9種目22流派の武芸が教授された^{1) 2) 3) 4)}。

そこで、本研究は、近世において中津藩で教授された武芸流派を取り上げ、流祖・師範、創流時期、系譜等から、それらの流派の特徴と中津藩の武芸教育の一端を解明することを目的とする。

なお、本稿では、概ね江戸時代の原型が成立する織田信長の上洛（1568年）から徳川慶喜の大政奉還（1867年）まで、すなわち、室町（戦国）時代末期・安土桃山時代および江戸時代をあわせて近世として取り扱った。



図1. 現在の山国川流域

*本校専攻科 制御工学専攻1年（中津市立緑ヶ丘中学校出身）



図2. 現在の中津城

1. 中津藩の教育

(1) 教育の始まりと藩校進修館

享保2年(1717)に10万石を与えられ中津に入部した初代藩主の奥平昌成は、2年後の享保4年(1719)に「士の政治を施行するに當りては先づ書を読みて道を知らざる可らず之れ我家の定法なり⁵⁾」と告諭した。そこで、毎月儒臣を招いて小姓格以上の上士に聴講させ、怠慢者には懲罰を与えて儒学を奨励した。このように藩主の命にて講習を受けさせたことから、中津藩での公的教育の始まりとも考えられる。

組織立った教育は、一般的に士族を対象とした家塾や私塾が発達した後、庶民を対象とする寺子屋が出現するのが通常である。しかしながら、豊前・豊後の場合は全く逆で、まず寺子屋が普及した後に、家塾や私塾、そし

て藩校が作られた。豊前・豊後の寺子屋は、九州で最も古いとされ、豊後高田市一畑の河野次郎右衛門の戴星堂が天正元年(1573)に創設された。また、中津藩の寺子屋数は133にも上り、豊前・豊後国で最多であり、なかでも旧下毛郡耶馬溪町が78とさわめて多かった⁶⁾。

江戸時代における全国的な教育政策の流れに乗り、中津藩では5代藩主奥平昌高が藩校の建設に着手した。進修館は、寛政2年(1790)に野本雪庵の屋敷を講堂として始まり、その後寛政8年(1796)、中津城下の現在の南部小学校を含む敷地(約23100m²)に創建された。

日本教育史資料⁷⁾に「文武両道ヲ兼修ノ制ナリ 文武程度ノ比例無シ・・」とあるように、文武の割合は決められていないものの、必ず両方を学ばなければならなかった。また、学習内容は、和学・漢学・洋学・医学・筆道・算術に加えて武芸各流と遊泳であった。そこで学ぶ生徒数は、概ね200名から300名であった⁸⁾。

(2) 進修館での稽古場

進修館での武芸教育は、敷地内の稽古場および師範家の道場において行われていた⁹⁾。

図3は、江戸時代の進修館の見取り図である。これは、『史蹟名勝天然記念物調査報告書第十三輯¹⁰⁾』にあった図をもとに作図したものである。進修館の敷地内は、剣術と槍術の稽古場で占めていることから、これらの流派が特に盛んに行われていたことがうかがえる。

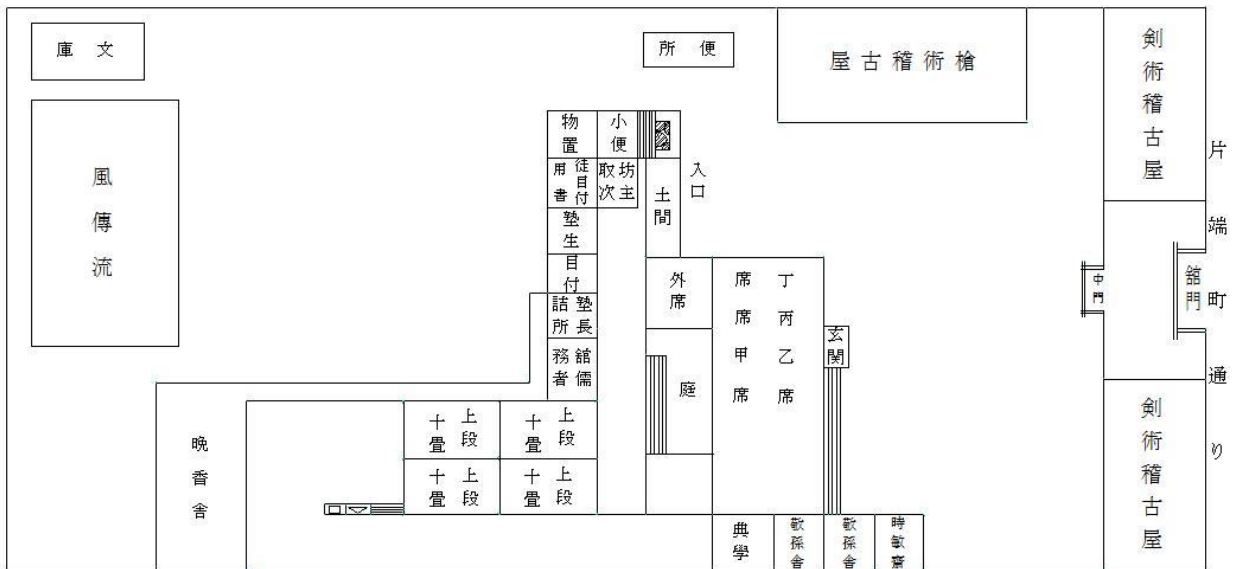


図3. 進修館の見取り図

2. 中津藩で行われた武芸流派

近世の中津藩では藩校進修館を中心に武芸教育がおこなわれ、9種目22流派が教授されていた。各流派の歴史については、『武芸流派大事典¹¹⁾』『武術双書¹²⁾』『日本武道史¹³⁾』『剣道五百年史¹⁴⁾』『日本武道大系¹⁵⁾』『近代剣道名著大系¹⁶⁾』および中津藩関係史料を参考に記述した。

(1) 剣術

①外他一刀流

流祖は、鐘捲自斎であり、遠州秋葉に生まれ越前に住んだ。慶長年間の人と言われるが、生没年ともに詳らかになっていない。秋田藩伝の戸田一刀流の戸田一刀斎家通が文禄4年(1595)に7月22日に秘法を得たという記述から推測すると、流祖の自斎は、1590年頃から1610年頃に活躍したものと考えられる。中津藩には、4代目の外他市兵衛俊勝から伝承された。また、当流は中津藩において、2つの伝系があったと考えられる。

中津出身で幕末の剣豪、島田虎之助も文政9年(1826)12才で堀次郎左右衛門を師範とするこの流に入門して学んだ。島田虎之助は、「剣は心なり 心正しからざれば 剣また正しからず 剣を学ばんと欲すれば まず心より学ぶべし」と教え、「剣心一致」として、心の修行の重要性を説いた。



図4. 剣心一致の碑(天仲寺公園 築上郡吉富町)

②神道(新当)流

流祖は飯篠家直であり、下総国香取郡飯篠村の生まれである。香取郡山崎村に移って、刀や槍を研究し、鹿島・香取の両神宮に祈願して天真正道流を開創したといわれる。家直は、応永年間(1394 - 1427)の生まれで將軍足利義政に仕え、

文明12年(1480)に入道して長威斎と号し、長享2年(1488)に死去した。

中津藩では、家直に学んだ松本備前守政信、小神野越前守幹道から主に古宇田不問斎通秋の家系へと伝承された。

③小野派一刀流

流祖は、伊藤一刀斎景久である。一刀斎に関する確かな資料が見当たらず定説的なものはない。生年については、天文19年(1550)と永禄3年(1560)の説がある。生国についても、伊豆、近江、西国などがあり定かでない。一刀斎は、中条流の達人であり、自身の体験をもとに幾流かを学ぶことによって一刀流を開創したものであろう。この一刀流は、柳生新陰流とともに江戸期の兵法界を二分する程の発展を示した。

伊藤一刀斎に学んだ小野次郎右衛門忠明(神子上典膳)の子、忠常以降を小野派一刀流という。小野は上総国夷隅郡丸山町神子上に来て郷士になって、その後里見家に仕えた。文禄2年(1593)には伊藤一刀斎の推挙で徳川秀忠の師範になった。その後、それまでの神子上姓から母方の小野姓に改めた。忠明は寛永5年(1628)11月7日に没し、その子忠常は寛文5年(1665)12月6日に没した。

中津藩においては、師範の富永應助邸内の道場に門弟や一流の武者修行者が集まって熱心に修行した様子¹⁷⁾についての記述がみられる。

④東軍流

開祖を東軍僧正と仰いだ川崎鑰之輔が流祖である。鑰之輔は数流の剣術の奥義を極めて、自分では流名を称しなかったが、世間の人々は東軍者と呼んだ。鑰之輔は、13才の頃から鞍馬八流の達人であった父について学び、槍を富田午生、剣を富田勢源に学んだ。後に父が浪人となったので、鑰之輔は比叡山の東軍僧正にあずけられて刀術を学び、みずから東軍権僧正となり東軍流を創始した。鑰之輔の生涯については、詳らかな資料はないが、流派の伝系から推測すると、創流時期は戦国時代であろう。

⑤奥山流

流祖は奥山休賀斎であり、三河国の奥平出羽守貞久の七男であった。生年は永正12年(1515)である。上州に来遊して上泉秀綱のもとで一年余り修行して免許を得て、帰国して三河国奥山郷に住んだ。その後、奥山明神に祈願して、奥山流を創流した。別名、神影流ともいう。休賀斎は、慶長7年(1602)77才で死去した。

(2) 槍術

①風伝流

流祖は彦根藩士の中山源兵衛吉成である。本来は、竹内流の中山角兵衛家吉の門人であり、源兵衛から以降、風伝流と改称した。風伝とは「風起れども見えず、触るれども聞こえざる」の言葉から、槍の遣い方になぞってつけたものと言

われる。『武芸流派大事典¹⁸⁾』の記述から、江戸時代初期に創流されたと推測される。

竹内流の流祖は、竹内藤一郎則正であり、則正から4代目の吉成によって風伝流と改称、その後中津藩・彦根藩・尾張藩・高田藩・仙台藩・新発田藩などに伝承された。

②種田流

流祖は唐津藩士種田平馬正幸であり、江戸時代前期に創流された。正幸は、若い頃から槍術を好み、諸流の名手について槍を学び、特に大島雲平吉綱の高弟、月瀬伊左衛門清信に師事して素槍の極意を得た。この月瀬伊左衛門は大島流祖大島伴六の門人であった。また、中江新八義の中江流も修行し、これらの数流をもとに創流に至った。種田流祖正幸については、不詳の部分が多い。

種田流の槍は、長さ二間(約3.6メートル)から二間一尺(約4メートル)ほどの素槍であった。槍の特徴は、身が短く、太刀打が長いいため多くの銅金を用いていること、柄の石突際に鉛を彫り入れ、その上を麻で巻き、漆で塗り固めていることである。全体的に厳しい印象を与え、重量も重く重心が低いために使いやすく工夫してある。種田流の基礎は、流祖正幸・幸勝・幸忠の三代で確立し、早い時期から実戦的な仕合を行っていた。したがって、江戸後期に槍術界が仕合最盛期になった時には、その時代の流れに乗って急速に普及していった。

③外他流

流祖については、剣術の外他一刀流と同様であり、戦国末期から江戸初期にかけて創流されたものと考えられる。

中津藩の伝系は、鐘捲自斎から伝承された外他智眞、佐竹知義、佐竹義陳、菅沼定易、菅沼定経、菅沼修蔵、桑名清次郎という師範の記述がある。

④本間流

流祖は本間勘解由左衛門昌能である。昌能は、塚原ト伝に神道流ならびに新当流創術を学んだ後、この流を開創した。また、昌能の子、重成から本間流と称したという説もあり、『中津藩史¹⁹⁾』には、本間外記重成を祖とした伝系の記述があり、本間流を称した重成の流祖説によるものと推測される。中津藩・福井藩・盛岡藩に伝承された。

(3) 長刀

①東軍流

剣術にある東軍流と同じ流祖である。川崎鑰之輔から受け継いだ川崎太郎(大輔)から川崎次郎清房へと受け継がれた伝系である。中津藩では、清房から堀新左衛門親房、佐算恕平種則へと伝承された。

(4) 居合

①田宮流

流祖は田宮平兵衛重正である。重正は、上州岩田村の出身で林崎重信に抜刀術を習い、後に対馬と改称した。重正の子、田宮対馬守長勝が正保2年(1645)に死去したことから推測すると、重正は戦国時代から江戸時代の初めにかけて活躍し、創流したものと考えられる。長勝は、二天一流の流祖である宮本武蔵と同年に死去している。

②立身流

流祖は伊予の出身、立見三京である。永正15年(1518)に生まれ、柔と居合を極めて、剣術・捕縄にも精通しており、立見流居合柔術繩甲胃勝之業と称した。

中津藩では、立見三京の6代目、桑島太左衛門(将監)の門人である木村権右衛門が立見新流、同じく門人の大石千助貞節が立見当流として分派させて伝承された。

(5) 弓術

①日置流雪荷派

流祖は日置弾正正次であり、嘉吉3年(1443)に生まれ、近世弓術中興の祖といわれる。伊賀平氏の出でその射法を伝えており、さらに源氏系逸見の射法を併せ、若い頃に隣国近江の六角佐々木氏に従っていた。戦国時代前期に修行のため諸国を遊歴し、審固持満・飛貫中の妙術を会得し、流派を創始した。正次は、文亀2年(1502)59才で伊賀の地で死去した。

中津藩には、吉田六衛門重勝に学んだ伴喜左衛門一安からの伝系によって伝承されており、道雪派との関連も示唆される。

②日置流印西派

雪荷派と同じく流祖は、日置弾正正次で嘉吉3年(1443)に生まれ、文亀2年(1502)59才で死去した。

印西派は、正次の弟子である吉田出雲守重綱(花翁流)の流れを受けて吉田源八郎重氏が分派して継承したものである。

中津藩には、印西派の主な師範として原元輔、菅沼市平という記述がある。

(6) 馬術

①山片流

流祖は山片内記友勝である。創流時期は不明であるが、他の馬術と同年代に創流されたものと推測される。山片内記友勝から継承されて12代目師範には逸見武四郎久敬とある。山片流の稽古場は、外馬場にあり市外西方の山国川に沿った所にあったという記述がある²⁰⁾。

②八條流

流祖は永正・天文年間(1504 - 1553)の人で八條近江守房繁、または修理亮房重ともいった。小笠原流の小笠原民部少輔植盛の門人であり、永正5年(1508)に印可を得た。

房繁は武蔵国八條の出身と上杉系図にあり、現在の埼玉県南埼玉郡八瀬村八條をさしている。しかし、房繁の祖父修理亮満朝を流祖としたという説と房繁の子の六郎朝繁から八條流と称したという説もある。

この房繁の系統は、後に仙台藩に定着し、すべて八條流が占めた。その他では、徳川幕府・上州沼田藩・尾張藩などで教授された。また、筑後柳川を中心とした地域でも盛んに行われた。中津藩の八條流については、「前代ハ鹿児島島津家ニアリ²¹⁾」という記述がみられることから、薩摩藩の流れを受けているものと考えられる。

(7) 柔術

①起倒流

流祖は福野七郎右衛門正勝(友善)である。創流するにあたり、柳生家の茨木専斎俊房も関わっている。本来、組打を主としていたが、創流する過程で和術、居合、鎧組打、棒、陣鎌などを総合して行った。茨木専斎俊房が寛永14年(1637)乱起倒流を命名したことから、同時期に創流したものと推測される。

中津藩の主な伝系は、福野正勝から寺田平左衛門定安、寺田勘右衛門正重、吉村兵助扶寿、堀田佐五右衛門頼康、滝野専右衛門貞高遊軒、奥山寒露齋久豊、太田周助、小林猪右衛門、尾林繁太などである。

②吉岡流

流祖は吉岡一之進重勝で下野河内郡宇都宮の人である。中津藩と水戸藩で伝承された。中津藩では、12代師範の吉田耕作から和智二太夫・村瀬程八・徳田友吉の3人に伝承された。

③楊心流

流祖は、秋山四郎兵衛義時で四郎左衛門ともいわれる。寛永2年(1625)頃に生まれ、延宝3年(1675)頃までの人とみられる。肥前長崎の人で小児科医の医学修行で漢土に赴いた際に、博転という人から柔術三手を学んで帰国した。また、武官という者から捕手三手法二十八活を授けられた。手数が少なく学ぶ者が少なかったため、太宰府天満宮に百日間参籠して捕手三百三手を開創した。

(8) 砲術

①長谷川流

流祖は長谷川八郎兵衛勝家である。一説には一家と言われたともある。遠江の出で井伊直孝の臣となっていたが、後に越後の松平忠輝に仕えた。砲術は稲富一夢に稲富流を学んだあと、他の流派を修行し、一流を開創した。勝家は、寛永

5年(1628)12月1日に没した。

中津藩の長谷川流は、この長谷川流との関わりはあるものの詳らかになっておらず、伝系に長谷川氏の名前は見当たらず佐々木補次郎からの伝系となっている。

②磯流

流祖は磯与三左衛門景次である。吉田流砲術の吉田六郎左衛門隆伯の門人であった。秋月藩・中津藩・久留米藩に伝承された。

中津藩の伝系は、秋月藩の松延市平からの流れであり、井上庄右衛門、飯田権十郎、飯田良造へと継承された。

(9) 兵学

①甲州流

流祖は小幡勘兵衛景憲であり、元亀元年(1570)に生まれた。徳川秀忠の小姓であったが脱走して、三成の乱に井伊直政の軍として出征した。

夏の陣の前には大阪城に入って偵察したあと、徳川家康にその情報を伝え、旗本に復帰した。五百石を賜った後、千五百石を賜るまでになった。高坂弾正昌信著の甲陽軍艦を学び、さらに改善を加え武田軍に貢献した。また、岡本実貞にも教えを受け、軍配は岡本半助宣就・赤沢太郎左衛門・益田民部秀成に学び、甲州流を創始した。寛文3年(1663)2月25日に92才で死去した。

上述のとおり、中津藩では剣術5流派、槍術4流派、長刀1流派、居合2流派、弓術2流派、馬術2流派、柔術3流派、砲術2流派、兵学1流派の合計9種目22流派の武芸が行われていた。

それぞれの流派が、中津藩に導入された時期については、史料が乏しいため詳らかにできないが、収集した史料から検討した各流派の創流時期については、図5のとおりである。

創流された明確な年代が史料に記述されていない流派については、流祖の生年・没年および修業歴等から創流時期を推定した。

おわりに

近世における中津藩では、藩校進修館を中心に武芸教育を行っていたが、城下の師範家の道場においても教授されていた。中津藩で教授された流派は、9種目22流派であり、なかでも剣術5流派、槍術4流派と約半数を占め、これらは特に盛んに行われていた。

『家元の研究²²⁾』によると、武芸流派の分派発達の特色については、以下の四つに分類される。

- ①近世以前に創流され、その後の流派の大きな源流になったもの
- ②近世以前に創流されたが、後代に大きな影響を与えなかったもの

- ③近世初頭に創流され、後代に影響を与えなかったもの
- ④18世紀中葉以降、流派活動の安定した後に、代表的な流派の長所を取捨総合して創流したもの

中津藩では、13流派が③の分類に属し、近世初頭に創流された流派が半数を占めており、比較的早い時期に創流され、後に大きな影響を与えなかった流派が多い。上記の分類をもとにすると、中津藩で教授された武芸は次のように分類される。

- ①神道流、日置流（雪荷・印西） **[3流派]**
- ②東軍流（剣・長）、立身流、田宮流、山片流、八條流 **[6流派]**
- ③外他一刀流、小野派一刀流、奥山流、風伝流、種田流、外他流、本間流、起倒流、吉岡流、楊心流、長谷川流、磯流、甲州流 **[13流派]**
- ④該当なし

流派の創流時期については、家光晩年の頃、それまでの総

合武術から個性化した流儀ができあがる頃を「第一期」とすると、元禄太平の武芸の停滞期で形式化した時代を過ぎて幕府の武芸奨励があり、各藩が藩校を建立した時期を「第二期」新流派成立の時代といっている²³⁾。

この流派創流の全国的傾向と同様であるが、中津藩では「第一期」新流派成立の時代に創流された流派（13流派）が多い。また、特徴的なことは「第二期」に創流された流派がなく、同じ豊前国であった小倉藩が「第二期」に創流された流派が多いことと比較すると、保守的な側面や何らかの事情があったものと考えられる。流派の成立には、天才的な人物の出現、技法が非常に高度であること、技術体系、教習過程、伝授方法等の形態を持っていることが必要とされる²⁴⁾。中津藩では、これらの条件がなかなか満たされず、新流派の創流に至らなかったことが推測される。

以上、史料収集可能な範囲で近世における中津藩の武芸流派の考察を試みたが、それらの一部を解明したに過ぎない。今後は、各流派の伝系や修行の実態等を明らかにすることが課題であり、それらが解明されると武道史や郷土史の研究に大きく貢献するであろう。

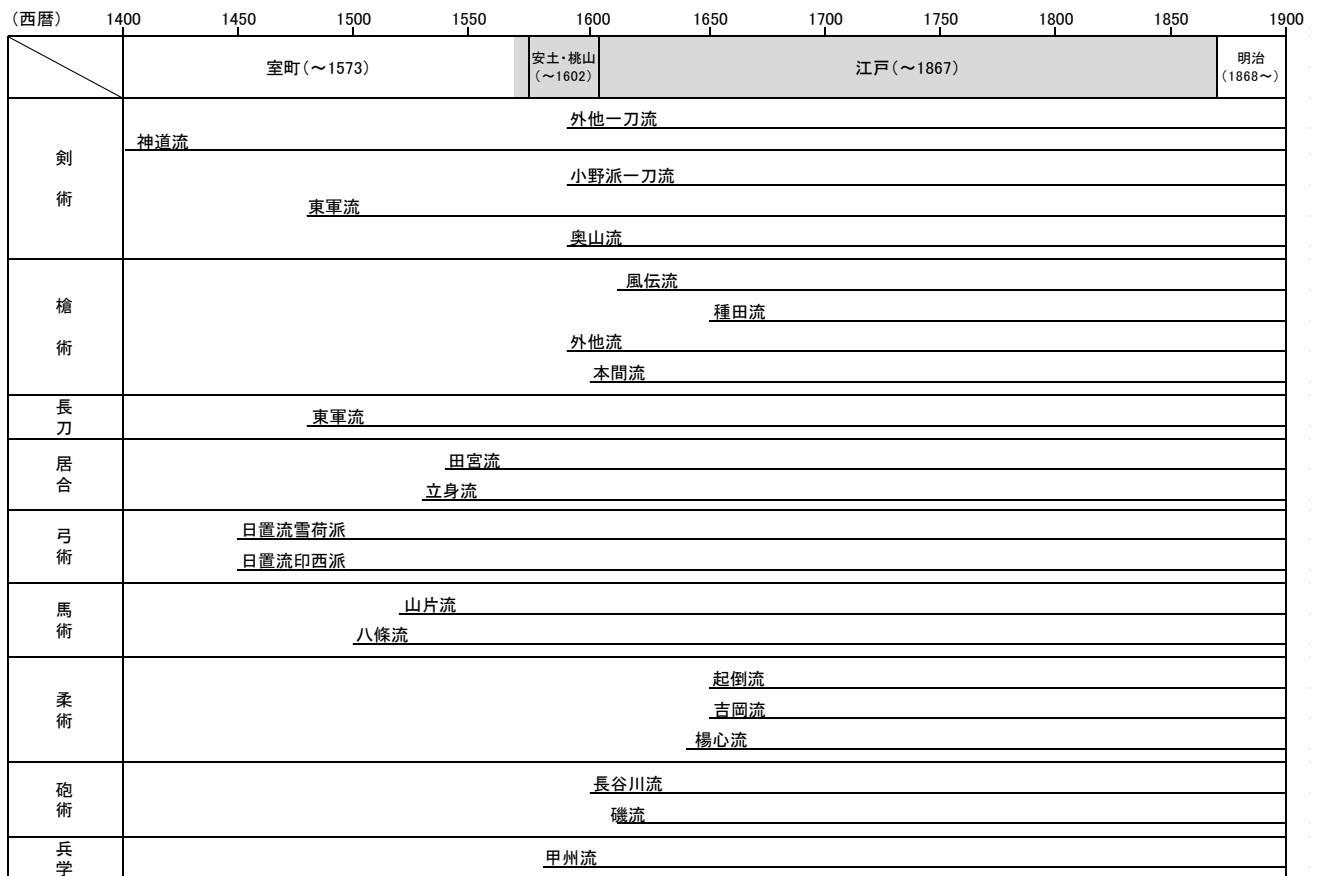


図5. 中津藩における武芸流派の創流時期



図6. 現在の武道場 練心館

図6は、現在の中津市の武道場、練心館である。昭和16年に建てられ、中津の中心部である文教地区に堂々の佇まいである。近世から近代にかけて、我が国の歴史に残る人材を多数輩出した進修館のように、この練心館から世界で活躍する若者が数多く輩出されることを切望してやまない。

謝辞

本研究を遂行するにあたり、史料整理や作図等に協力してくれた教え子、本校機械工学科4年の久保諭敏君（中津市立緑ヶ丘中学校剣道部出身）に感謝の意を表す。

参考・引用文献

- 1) 木村礎・藤野保・村上直編，藩史大辞典第7巻九州編，雄山閣出版，1988
- 2) 大分県社会課，藩政時代の教育 社会教育資料第十一輯，1925
- 3) 文部省編，日本教育史資料 参，文部省，1890
- 4) 黒屋直房，中津藩史，国書刊行会，1987
- 5) 前掲書4)，P577
- 6) 大分県教育庁総務課 大分県教育百年史編集事務局編，大分県教育百年史第一巻通史編(1)，大分県教育委員会，1976，PP49-53
- 7) 前掲書3)，P75
- 8) 前掲書3)，P76
- 9) 前掲書3)，P75
- 10) 大分県史蹟名勝天然記念物調査會，史蹟名勝天然記念物調査報告書第十三輯，1936
- 11) 綿谷雪・山田忠史編，武芸流派大事典，東京コピー出版部，1978
- 12) 武術双書，名著刊行会，復刻1992
- 13) 横山健堂，日本武道史，島津書房，復刻1991

- 14) 富永堅吾，剣道五百年史，百泉書房，1972
- 15) 同朋舎出版，日本武道大系，1982
- 16) 同朋舎出版，近代剣道名著大系，1986
- 17) 前掲書4)，P560
- 18) 前掲書11)，P718
- 19) 前掲書4)，P568
- 20) 前掲書4)，P557
- 21) 前掲書4)，P558
- 22) 西山松之助，家元の研究 西山松之助著作集第一巻，吉川弘文館，1990，P263
- 23) 前掲書22)，P285
- 24) 前掲書15)，第十巻 PP43-44
- 25) 今永清二編，中津の歴史，中津市刊行会，1980
- 26) 児玉幸多・北島正元監修，新編物語藩史第十一巻，新人物往来社，1975
- 27) 藩校進修館跡 相原廃寺IV 中原遺跡 中津市文化財調査報告第11集，中津市教育委員会，1992
- 28) 濱田臣二，小倉藩における武道教育，北九州工業高等専門学校研究報告第28号，1995
- 29) 濱田臣二，福岡県における近世剣術流派の一考察，北九州工業高等専門学校研究報告第31号，1998
- 30) 濱田臣二，福岡県における近世武芸流派の一考察 - 槍術・柔術・兵学について - ，北九州工業高等専門学校研究報告第34号，2001
- 31) 濱田臣二，福岡県における近世武芸流派の一考察 - 弓術・馬術・砲術について - ，北九州工業高等専門学校研究報告第33号，2000
- 32) 下川潮，剣道の発達，体育とスポーツ出版社，復刻1977

(2013年11月11日 受理)